

# 民主化闘争情報

No. 831  
2011年9月8日  
発行 日本鉄道労働組合連合会  
(JR連合)

本日発売の『週刊新潮』に「史上最低の『山岡国家公安委員長』の革マルと裏金要求」と題する記事が掲載された。同記事は、JR総連・東労組への革マル派浸透問題に触れたうえで、革マル派を監視する立場にある国家公安委員長としての山岡議員の資質に疑問を呈している。

## 『週刊新潮』が山岡国家公安委員長の資質に疑義！ JR総連革マル浸透問題にいかなる見解を示すのか？！

『週刊新潮』（9月15日号）は、野田内閣発足を受け、「『ガン細胞』が見つかった『野田どじょう内閣』身体検査」と題する特集を組み、そのトップ記事で、山岡国家公安委員長とJR総連・東労組との関係について、以下のように厳しく問い質している。

「よかったな」。国家公安委員長の座を射止めた山岡賢次氏(68)に、小沢一郎元代表はこう言ったという。だが、この抜擢人事、国民や警察組織にとってはちっともよくなかった。とりわけ警察官僚が「史上最低」と嘆いているのである。革マルとの浅からぬ因縁、そして裏金要求の過去を持つ山岡氏の本性を紹介する。まずは、革マルとの関係について。

＜全日本鉄道労働組合総連合会（JR総連）及び東日本旅客鉄道労働組合（JR東労組）内には、影響力を行使し得る立場に革マル派活動家が相当浸透していると認識している＞

昨年5月11日、当時の鳩山内閣はこんな政府答弁書を出している。すなわち、JR総連（以降、総連）とその傘下のJR東労組（以降、東労組）は、破壊活動防止法の調査対象とされてきた、極左暴力集団の革マルと“縁深い”団体であることを、政府が公式に認めたわけだ。

そんな“革マル浸透組織”の総連ならびに東労組と、山岡氏は極めて親密な関係にある。彼が代表を務める民主党栃木県第4区総支部の収支報告書には、一昨年、それぞれから30万円、計60万円の寄付がなされた旨が、臆面もなく記載されているのだ。しかも、「山岡氏は年に数回、賢友セミナーという資金集めのパーティーを開いているんですが、1口2万円のパーティー券を総連や東労組に買ってもらっています」と明かすのは公安関係者。「彼は栃木4区で自民党候補に連戦連敗し、比例での復活を繰り返してきた。選挙に弱い彼にとって、組合員だけで7万の票を持つとされる総連ほどありがたい存在はないんです。どんな組織か分かっているながら、票とカネ目当てに付き合っているんでしょう」

実際、先の寄付に加えて、2006年から10年までの賢友セミナーに関する“内部資料”によると、総連と東労組は5年間で合わせて208万円分のパーティー券を購入している。これだけ、お世話になっていれば、山岡氏のほうも総連と東労組の肩を持つであろうことは当然予想されるが、案の定……。

2005年12月、警視庁公安部が業務上横領の容疑で総連や東労組の本部などへの家宅捜索を実施したことがあった。その9日後のことだった。「野党第一党の民主党の議員がヒアリングと称して、衆議院第2議員会館の第3会議室に警察庁の警備局公安課極左対策室長ら呼びつけた。このヒアリングに呼び掛け人の一人として出席した山岡氏は、家宅捜索に関して、“横領事件の捜査の中身（詳細）は言えないのか”“あまりにも自己中心的な捜査”などと、総連と東労組寄りの発言を繰り返しました」（同）

こんな人物が、革マルを監視すべき警察行政の要である国家公安委員長に据えられるとは、世も末のブラックジョークと嗤う以外にあるまい。

さらに、同記事の中で、初代内閣安全保障室長で、警察庁警備局OBの佐々淳行氏は、「普通は、大臣を決める前に身辺調査をするもんじゃありませんか。民主党は最も相応しくない人に国家公安委員長のポストを与えてしまいましたね。国会で、自民党から追及されるのには目に見えています」と指弾している。

**JR総連推薦議員懇談会の代表世話人を務める山岡国家公安委員長は、果たして、JR総連・東労組への革マル派浸透を断定した政府見解を踏襲するのでしょうか？**